

文求堂主人田中慶太郎訳『東語士商叢談便覧』の日本語

— 人称代名詞・当為表現・ワア行五段動詞連用形の音便を例として —

園 田 博 文

山形大学 教職・教育実践研究 第12号別刷

平成 29 年 3 月

文求堂主人田中慶太郎訳『東語士商叢談便覧』の日本語 —人称代名詞・当為表現・ワア行五段動詞連用形の音便を例として—

園田博文¹⁾

『東語士商叢談便覧』(明治38年刊)を資料として、明治期以降揺れのある表現を取り上げた。この資料は、金国璞が明治34年から35年にかけて著した中国語教本『北京官話士商叢談便覧』の日本語訳で、訳者は文求堂書店の田中慶太郎である。田中は、書肆として『北京官話士商叢談便覧』をはじめ数々の書籍の出版を行うとともに、みずからも多数の書物を著した。『東語士商叢談便覧』はそのひとつである。具体的に扱った項目は、人称代名詞、当為表現、ワア行五段動詞連用形の音便についてであり、特に明治30年代における近代日本語の一端を同時期の他の資料との比較を通して明らかにすることが本稿の目的である。その結果、人称代名詞については、総ルビであることから、「私」「汝」「貴下」の読みが確定できることがわかった。これは、バラルビである『官話指南総訳』などでは確認を得ることができなかったものである。当為表現については「ナイ系」「ズ系」とも同程度現れていた。当為表現の周辺的な表現として、現代語に通じる「ナケレバ駄目(ダメ)デス」、「ナケレバ駄目(ダメ)ダ」、「ナクツテハ駄目(ダメ)デス」という例が現れていた。これは、現れた6例すべてが原文の中国語「非～不行」「不～不行」等と対応しており、中国語を日本語に翻訳する際の問題との関連がある。同時期の小説や雑誌と比べても早い方の用例であり、従来言及されたことのないものである。ワア行五段動詞連用形の音便に関しては、『官話指南総訳』とは傾向が異なり、促音便形の多用が認められた。

キーワード：文求堂，田中慶太郎，人称代名詞，当為表現，ワア行五段動詞連用形の音便

1. はじめに

『東語士商叢談便覧』(明治38年刊)を資料として、明治期から現代にかけて揺れのある表現を扱う。具体的には、人称代名詞、当為表現、ワア行五段動詞連用形の音便について見る。特に明治30年代における近代日本語の一端を同時期の他の資料との比較を通して明らかにすることが本稿の目的である。

園田(2016a)において、明治38年刊の『官話指南総訳』の語法を検討した。この結果との比較も行う。

また、園田(2016b, 2017a, 2017b)では、大正から昭和初期にかけての資料を分析し幅を広げている。

2. 『北京官話士商叢談便覧』の書誌

書誌の事項を記すと以下の通りである。

- ・書名：『北京官話士商叢談便覧』
(別名『士商叢談便覧』)
- ・著者：金国璞(東京外国語学校清語科教師)
- ・発行者：田中慶太郎

・刊年：上巻・明治34年12月20日(初版)

下巻・明治35年6月20日(初版)

・発行所：文求堂書店

(東京市本郷区本郷三丁目十番地)

・売捌所：文求堂書店

(京都市下京区寺町通四条北)ほか

『北京官話士商叢談便覧』上下巻の初版本は、国立国会図書館デジタルコレクションに収録されている。ただ、「この資料は、著作権の保護期間中であるか、著作権の確認が済んでいない資料のためインターネット公開をしていません」との説明がある。このため、図書館送信参加館である山形大学図書館で閲覧し、確認を行った。上巻には「大日本明治三十四年冬刊行于東京」、下巻には「大日本明治三十五年夏刊行于東京」と記されている。『北京官話士商叢談便覧』上巻については、『日本明治時期漢語教科書彙刊 第12冊』(張美蘭, 2011, 広西師範大学出版社, 影印本), および、『中国語教本類集成 第1集第4巻』(六角恒廣, 1992, 不二出版, 複製本)も利用した。ともに、明治36年3月25日再版本をもとにしたものである。上巻が50章

1) 山形大学地域教育文化学部

分、下巻も同じく 50 章分ある。ちなみに、下巻については、六角（1994）で「下巻は未見である」と述べられている。今回、下巻の本文を見られたこと、さらに、上下巻とも初版本を見ることができたことには意義がある。

八木（2011b）では、文求堂が京都から東京に移った後で、東京の文求堂書店（本郷三丁目十番地）から発行された最も古い書籍として『北京官話士商叢談便覧』上下巻を挙げている。

3. 『東語士商叢談便覧』の書誌

(1) 書誌的事項

書誌的事項を記すと以下の通りである。

- ・もととなった書：『北京官話士商叢談便覧』
- ・書名：『東語士商叢談便覧』
- ・訳者兼発行者：田中慶太郎
- ・刊年：明治 38 年 6 月 20 日（初版）
- ・自序識年：明治 38 年 4 月
- ・売捌所：文求堂書店
（東京市本郷区本郷三丁目）ほか

『東語士商叢談便覧』の初版本は、国立国会図書館デジタルコレクションに収録されており、図書館送信参加館である山形大学図書館で閲覧し、確認を行った。

『東語士商叢談便覧』については、『日本明治時期漢語教科書彙刊 第 18 冊』（張美蘭，2011，広西師範大学出版社，影印本），および、『中国語教本類集成 第 1 集第 4 巻』（六角恒廣，1992，不二出版，複製本）を利用した。ともに初版本をもとにしたものである。第 1 章から第 100 章までである。

(2) 訳者田中慶太郎について

田中慶太郎については、伊藤（1992），成家（2009a），成家（2009b），成家（2010），八木（2011a），李（2005）等に郭沫若との関係も含め、詳しい紹介がある。郭沫若は、第六高等学校（岡山），九州帝国大学医学部に留学し、帰国後は国民党に参加するが、蒋介石に逐われ、昭和 3（1928）年日本へ亡命した。亡命後は、田中慶太郎が郭沫若を支援していた。

慶太郎は明治 13（1880）年京都に生まれた。京都生まれなので、訳者名にも「西京田中慶太郎訳」とある。生家は、文求堂という書肆である。慶太郎の祖父治兵衛が文久元（1861）年に開業したため、このときの元号に因んで名づけられた。日清戦争後の明治 29（1896）年頃、中国語を習うために東京に出て、東京外国語学校に通ったという。つまり、言語形成期は京都で過

したことになる。

東京外国語学校卒業後は、何度も中国を訪れ、明治 34（1901）年に、文求堂を京都から東京に移転した。

(3) 序から見る成立事情

序の全文は以下の通りである。

東語士商叢談便覧引

金卓安先生の将に東京を去らんとするや北京官話士商叢談便覧を邦語に訳して刊行すべき事を我に託せらる爾後数年京に在るの日は業務煩忙京に在らざるの日は東奔西走未だ志を果すに由なく先生に辜負するや甚だ大なり頃者病を相州の海浜に養ふて少間を得筆を執りて此書を成す即ち稿を四月十九日に起して四月二十八日に脱す訳語不馴瑕疵万幅笑を大方に諒す必ず免れざるを知る惟だ東隅西楡の義頑愚自ら慰むるのみ古より士の述作に従ふや必ず微旨ありて存す若し金卓安先生士商叢談便覧一百章を以て只だ北京官話を学習するに止まるのみと言はば我は先生の為に悲まざるを得ざる也

明治三十八年四月西京田中慶太郎書于相州鎌倉

『東語士商叢談便覧』は、「燕京卓安金国璞撰」「西京田中慶太郎訳」として出された。序によると 10 日ほどで翻訳を終えたようである。

4. 日本語の分析

(1) 人称代名詞（総ルビ）

『東語士商叢談便覧』は漢字片仮名交じり文で総ルビである。そのため、人称代名詞の「私」や「汝」等もどう読むかすべて明白である。園田（2016a）で『官話指南総訳』の人称代名詞を調べたときには、バラルビであったので、「私」「汝」「貴下」など読みが確定できないものが多数あった。この点、総ルビである『東語士商叢談便覧』は貴重である。例を見てみよう。

① 汝（アナタ）ハ今（イマ）何（ナニ）ヲ勉強（ベンキヤウ）シテ居（キ）マス（第 1 章の 1，1 頁，東語初版。①のような白丸印は『東語士商叢談便覧』〈初版〉の用例である。訳称として「東語初版」を用いた。以下同じ。各章には「第 1 章の 1」のように文番号も記されている。原文のルビは括弧の中に記した）

① 你現在用甚麼功哪（第 1 章の 1，1 頁，官話初版。①のような黒丸印は『北京官話士商叢談便覧』〈初版〉の用例である。略称として「官話初版」を用いた。以下同じ。各章には「第 1 章の 1」の

ように文番号も記されている)

- ② 汝(アナタ)ハ何処(ドコ)ノ学校(ガクカウ)デ、幾年(イクネン)勉強(ベンキヤウ)ヲシマシタ(第1章の2, 1頁, 東語初版)
- ③ 你在那書院裏, 用過幾年的功(第1章の2, 1頁, 官話初版)
- ④ 私(ワタクシ)ハ五年間(ゴネンカン)ノ勉強(ベンキヤウ)ヲシマシタガ, 今(イマ)ニナツテモ英語(エイゴ)ハ矢張(ヤハ)リヨク話(ハナ)セマセヌ(第1章の3, 1頁, 東語初版)
- ⑤ 我用了五年的功, 到如今英国話, 還是說不好(第1章の3, 1頁, 官話初版)
- ⑥ オ影様(カゲサマ)デ, 貴下(アナタ)ハオ健康(タツシヤ)デ, オ宅(タク)ハ御機嫌(ゴキゲン)デスカ(第12章の2, 20頁, 東語初版)
- ⑦ 托福都好, 您身体都康健, 府上全都好啊(第12章の2, 13頁, 官話初版)
- ⑧ 汝(オマヘ)ガ私(ワタクシ)ニ此(コ)ノ写真屋(シヤシンヤ)ハアノ写真屋(シヤシンヤ)ヨリ上手(ジャウズ)ダト云(ユ)フガ, 私(ワタクシ)ガ見(ミ)レバニ軒(ニケン)ノ写様(ウツシヤウ)ハ似(ニ)タリヨツタリデス(第29章の1, 54頁, 東語初版)
- ⑨ 你告訴我, 這個照像館比那個照像館強, 在我看他們兩家所照的像, 是魯衛之政(第29章の1, 35頁, 官話初版)

例数は多いので、今後待遇表現との関わりも含めて詳しく分析するとより詳細な面が見えてくると考える。本稿では、以下、明治30年代の実態が解明し尽くされていない「当為表現」と「ワア行五段動詞連用形の音便」について分析する。

(2) 当為表現

園田(2016a)でも概観したが、「(動詞) + なければならぬ」「(動詞) + ねばならない」の類を当為表現と呼ぶ。江戸時代から現代にかけての当為表現はきわめて変化に富んでいる。これらについては、田中(2001)にまとめられているので、いつの時代にどのような表現が生じたか、あるいは、盛んであったかが分かる。この成果を参考にしながら、『東語士商談便覧』の当為表現について見ていきたい。

まず、諸星(2009)による『台湾会話篇』(明治29<1896>年刊)の調査では、当為表現が11種類28例

現れており、「一文献としては極めて多彩である」とされる。後部分に「ナケリヤイカン」のような「いく」を使う形式も見られることが特徴である。

次に、園田(2016a)による『官話指南総訳』(明治38<1905>年1月20日刊)の調査では、当為表現が14種類78例現れていた。

その内訳を前部分がナイ系であるかズ系(ヌ系)であるかによって示すと以下の通りである。

【ナイ系】(8種47例)

「なければならぬ」(15例)、「なければならぬ」(6例)、「なければなりませぬ」(18例)、「なければなりません」(1例)、「なければなりますまい」(3例)、「なければなるまい」(1例)、「なくてはなりませぬ」(2例)、「なくてはなるまい」(1例)

【ズ系(ヌ系)】(6種31例)

「ねばならぬ」(16例)、「ねばならず」(2例)、「ねばならない」(1例)、「ねばなりませぬ」(10例)、「ねばなりますまい」(1例)、「ねばなるまい」(1例)

ナイ系が8種47例、ズ系(ヌ系)が6種31例で、前部分はナイ系が優勢である。

『東語士商談便覧』を調べたところ、当為表現は6種類62例現れていた。

その内訳を前部分がナイ系であるかズ系(ヌ系)であるかによって示すと以下の通りである。

【ナイ系】(3種32例)

「なければならぬ」(17例)、「なければならず」(1例)、「なければなりませぬ」(14例)

【ズ系】(3種30例)

「ねばならぬ」(15例)、「ねばならず」(2例)、「ねばなりませぬ」(13例)

ナイ系が3種32例、ズ系(ヌ系)が3種30例で拮抗している。例を見てみよう。

- ⑩ 汝(オマヘ)ガ此(コノ)手紙(テガミ)ヲ彼(カレ)ニ渡(ワタ)シ彼(カレ)ガ見(ミ)タナレバキツト汝(オマヘ)ニ返事(ヘンジ)ヲスルカラ, 汝(オマヘ)ヨク聴(キ)イテ来(コ)ナケレバナラヌ(第46章の8, 86-87頁, 東語初版)
- ⑪ 你把這封信交給他, 他看了信必然有告訴你的話, 你可要聽明白了(第46章の8, 57頁, 官話初版)
- ⑫ 原来(グワンライ)ソレハ国家(コクカ)ノ規例(キレイ)デ, 誰(ダレ)デモ從(シタガ)ハ

ナケレバナリマセヌ (第 22 章の 8, 40 頁, 東語初版)

- ⑦ 原来那是国家的定例, 誰也不敢不遵的 (第 22 章の 8, 26 頁, 官話初版)
- ⑧ 若 (モ) シ陸路 (リクロ) カラ品物 (シナモノ) ヲ運 (ハコ) ベバ, 駱駝 (ラクダ) 或 (アルヒ) ハ騾馬 (ラバ) ヲ雇 (ヤト) ハネバナラヌ, ソウスレバ運賃 (ウンチン) ハ高 (タカ) クナリマス (第 40 章の 8, 75 頁, 東語初版)
- ⑧ 若是起早道運東西, 那就得雇駝脚或是騾脚, 那脚錢可就更花多了 (第 40 章の 8, 49 頁, 官話初版)
- ⑨ 彼 (カレ) ハ今 (イマ) 金 (カネ) ノ融通 (ユウヅウ) ガ利 (キ) カヌ, 私 (ワタシ) ハ彼 (カレ) ニ幾許 (イクラ) カ心配 (シンバイ) シテヤラネバナリマセヌ (第 11 章の 11, 19 頁, 東語初版)
- ⑨ 他現在錢接不上了, 我得給他籌畫幾個錢 (第 11 章の 11, 12 頁, 官話初版)

『台湾會話篇』や『官話指南総訳』に比べると種類は少ないが, 用例数は, 62 例あることから, 固定化された表現が用いられていると言える。

このほか, 以下のような「ナケレバ駄目 (ダメ) デス」(4 例), 「ナケレバ駄目 (ダメ) ダ」(1 例), 「ナクツテハ駄目 (ダメ) デス」(1 例) という例が合わせて 6 例現れている。例を見てみよう。

- ⑩ 若 (モ) シ開港場 (カイコウヂヤウ) デ役 (ヤク) ニ付 (ツ) クナレバ, 會話 (クワイワ) ガ出来 (デキ) ナケレバ駄目 (ダメ) デス (第 1 章の 5, 1 頁, 東語初版)
- ⑩ 若是在通商口岸上当官差, 不会話不行 (第 1 章の 5, 1 頁, 官話初版)
- ⑪ アノ事件 (ジケン) ハ我等 (ワレラ) 兩人 (リヤウニン) ガ面會 (メンクワイ) シテ相談 (サウダン) シナケレバ駄目 (ダメ) デス (第 3 章の 4, 5 頁, 東語初版)
- ⑪ 那件事非我們俩人觀面商量不行 (第 3 章の 4, 3 頁, 官話初版)
- ⑫ 官納金 (クワンナフキン) ハ即刻 (ソクコク) 完納 (クワンナフ) シナケレバナリマセヌ, 一厘 (イチリン) 一毛 (イチモウ) デモ足 (タ) リナケレバ駄目 (ダメ) デス (第 33 章の 1, 61 頁, 東語初版)
- ⑫ 官項立刻都得交足了, 短一分一厘也不行的 (第 33 章の 1, 40 頁, 官話初版)

⑬ 若 (モ) シ緊要 (キンエウ) ナ事 (コト) ガアル時 (トキ) ハ, 電信 (デンシン) デ通信 (ツウシン) シナケレバ駄目 (ダメ) デス (第 93 章の 9, 175 頁, 東語初版)

⑬ 若是有緊急的事情, 非用電線伝信不行 (第 93 章の 9, 52 頁, 官話初版)

⑭ 此 (コノ) ニ三年 (ニサンネン) 風氣 (フウキ) ガ徐徐 (ジヨジヨ) ト開 (ヒラ) ケテ来 (キ) テ, アノ事理 (ジリ) ニ通 (ツウ) ジタ人達 (ヒトタチ) ハ, 皆 (ミナ) 新法 (シンハフ) ニ從 (シタガ) ハナケレバ駄目 (ダメ) ダト云 (ユ) フ事 (コト) ヲ知 (シ) ツテ居 (ヲ) リマス (第 94 章の 5, 177 頁, 東語初版)

⑭ 這兩年風氣也漸開了, 那明白人也都知道, 如今不改從新法是不行的 (第 94 章の 5, 53 頁, 官話初版)

⑮ 素人 (シロウト) ガアノ礦脈 (クワウミヤク) ヲ見 (ミ) テモ, 礦山 (クワウザン) ノ善惡 (ゼンアク) ハ分 (ワカ) リマセヌ, ドウシテモ技師 (ギシ) ニ頼 (タノ) ムデ見 (ミ) テ費 (注 1) (モ) ラハナクツテハ駄目 (ダメ) デス (第 77 章の 2, 145 頁, 東語初版)

⑮ 那外行的人看那砂綫, 也不能知道礦旺不旺, 非請礦師看是不行的 (第 77 章の 2, 32-33 頁, 官話初版)

⑩~⑮の原文である中国語の例はいずれも「非」「不」または否定的な語が先項となり, 後項に「不行」が来る構文である。具体的には, 「非~不行」(⑪⑬⑮), 「不~不行」(⑩⑭), 「短~不行」(⑫) となっている。これらの訳として「~ナケレバ駄目デス」「ナケレバ駄目ダ」「ナクツテハ駄目デス」が使われている。

このような表現については, 田中 (2001) で, 以下のように述べられている。

現代語にみられる「ナクテハコマル」「ナケレバダメダ」「ナクテハシカタガナイ」など, 後部分「コマル」「ダメダ」「シカタガナイ」の形は, すべて明治期の資料にみえている。(713 頁)

田中 (2001) に挙げられた例を見ると, 「惑溺するなら飽迄惑溺せんければ駄目だ」(『蒲団』), 「建て直して行かなければ駄目だと思つたのだ」(『暗夜行路』) とある。『蒲団』は明治 40 (1907) 年以降, 『暗夜行路』は大正 10 (1921) 年以降の刊行であるので, 『東語士商叢談便覧』の例の方が古い。

続けて, 田中 (2001) は述べる。

こうした周辺的な表現を追っていくと, 当然,

どこまでを、当為表現としてとらえていくかが問題になってくる。今回は「ネバ」「ナケレバ」あるいは「ナクテハ」などの前部分と、「ナラヌ」「イケナイ」などの後部分との結合形を中心にすえて、当為表現というものをとらえてみたが、右にあげたような、さまざまな表現形式を、当為表現の中に、いかに位置づけていくかは、今後に残される一つの研究課題である。(714 頁)

さらに、今回、国立国語研究所(2005)による太陽コーパスのCD-ROMで検索した。太陽コーパスとは、当時広く読まれた雑誌『太陽』のうち、明治28(1895)年、明治34(1901)年、明治42(1909)年、大正六六(1917)年、大正14(1925)年の5箇年分全文をコーパス化したものである。その結果、「ナケレバ駄目」「ナクテハ駄目」という表現は、明治28(1895)年、明治34(1901)年には見られず、明治42(1909)年が最も古い例であった。

例を見てみよう。

⑩ 又新会の立場からは、断然排斥しなければ駄目だ(雑誌『太陽』明治42<1909>年刊、「大流小流」作者未詳)

⑪ 矢張政治家と交際しなくては駄目である(雑誌『太陽』明治42<1909>年刊、「文士の見たる政治家」徳田秋声)

以上、田中(2001)で挙げられている小説の例や太陽コーパスで検索できる雑誌の例よりも古い用例が『東語士商叢談便覧』に見られたことになる。翻訳とも関連しているので、中国語会話書を調べる際に、今後の検討課題としたい。

(3) ワア行五段動詞連用形の音便

園田(2016a)でも概観したが、江戸語から東京語へ移り変わる過程で、ワア行五段動詞連用形の音便は、ウ音便形・促音便形併用からウ音便形の消滅という方向へと変わっていった。飛田(1992)による『和英語林集成』(初版)の調査では、ウ音便形表記の語が77語、ウ音便形促音便形両表記の語が5語、促音便形表記の語が193語となっている。諸星(2009)による『台湾会話篇』の調査では、ウ音便3例、促音便26例であった。

『官話指南総訳』では、ウ音便81例、促音便77例と拮抗しており、『和英語林集成』(初版)や『台湾会話篇』とは傾向が異なる。以下に詳細を示す。

【ウ音便】(28種81例)

「洗ふて」(1例)、「言ふた」(3例)、「云ふた」(1例)、「いふて」(1例)、「言ふて」(3例)、「伺ふて」(1例)、「受負ふた」(1例)、「負ふて」(1例)、「合ふて」(「合ふてる」1例を含む)(3例)、「逢ふた」(1例)、「遭ふた」(1例)、「遇ふて」(2例)、「会ふて」(1例)、「蔽うて」(1例)、「思うて」(2例)、「思ふて」(2例)、「想ふて」(2例)、「糾合(カタラ)うて」(1例)、「構ふて」(1例)、「狂ふた」(1例)、「狂ふて」(1例)、「買ふた」(3例)、「買ふて」(6例)、「従ふて」(1例)、「しまふた」(2例)、「しまふて」(1例)、「仕舞ふた」(1例)、「しもふたらば」(1例)、「添ふて」(1例)、「使ふた」(1例)、「使ふて」(1例)、「償ふて」(1例)、「出遇ふた」(2例)、「問ふた」(6例)、「問ふて」(3例)、「調ふた」(2例)、「整ふたる」(1例)、「計ふて」(1例)、「払ふた」(2例)、「振ふて」(1例)、「見習ふて」(1例)、「見計ふて」(1例)、「雇ふた」(3例)、「雇うて」(2例)、「雇ふて」(6例)

【促音便】(17種77例)

「合つて」(2例)、「遇つた」(1例)、「遇つたり」(2例)、「遇つて」(1例)、「会(ア)つて」(1例)、「会つて」(2例)、「扱つた」(1例)、「言つた」(15例)、「云つた」(1例)、「言つて」(12例)、「買つた」(2例)、「買つて」(5例)、「組合つて」(1例)、「従つて」(1例)、「しまつた」(12例)、「しまつて」(4例)、「了つて」(2例)、「使つて」(1例)、「つくらつたり」(1例)、「手伝(テツタ)つて」(1例)、「習つた」(1例)、「引合つて」(1例)、「拾(ヒロ)つて」(1例)、「向つて」(4例)、「貰つた」(1例)、「雇つて」(1例)

種類別に見ると、ウ音便は28種81例、促音便は17種77例で、ウ音便の方が種類が豊富であることが分かる。一方、促音便は、特定の語、たとえば、「言う」「しまう」等に集中している。なお、促音化が進行した現代語でも「問う」の場合は「問うた」「問うて」となる。これを除くと、ウ音便・27種72例、促音便・17種77例となる。

『東語士商叢談便覧』ではどうであろうか。ウ音便17例、促音便86例であった。

【ウ音便】(5種17例)

「言(ユ)フタ」(1例)、「言(ユ)フテ」(3例)、「云(ユ)フテ」(9例)、「念(オモ)フテ」(1例)、「買(カ)フタ」(1例)、「乞(コ)フテ」(1例)、「雇(ヤト)フテ」(1例)

【促音便】(17種86例)

「合（ア）ツテ」（1例）、「アツタ」（1例）、「遭（ア）ツテ」（2例）、「言（イ）ツタ」（1例）、「言（イ）ツテ」（1例）、「言（ユ）ツタ」（4例）、「言（ユ）ツテ」（13例）、「云（ユ）ツテ」（1例）、「請（ウケ）合（ア）ツタ」（1例）、「思（オモ）ツテ」（9例）、「買（カ）ツタ」（3例）、「買（カ）ツテ」（9例）、「食（ク）ツテ」（1例）、「従（シタガ）ツテ」（2例）、「支払（シハラ）ツテ」（2例）、「シマツタ」（4例）、「仕舞（シマ）ツタ」（1例）、「シマツテ」（9例）、「違（チガ）ツテ」（1例）、「使（ツカ）ツタ」（1例）、「使（ツカ）ツテ」（4例）、「出（デ）遇（アツ）テ」（1例）、「出（デ）遇（ア）ツテ」（1例）、「モラツタ」（1例）、「モラツテ」（6例）、「雇（ヤト）ツテ」（2例）、「酔（ヨ）ツテ」（2例）、「笑（ワラ）ツテ」（2例）

ウ音便形は5種とかなり限られていることがわかる。「言（ユ）フテ」の類が13例である。一方、促音便形は「言（ユ）ツテ」の類が18例あり、例数では促音便形の方が多い。また、「言（イ）ツテ」という言い方も見られる。

「念（オモ）フテ」（1例）、「買（カ）フタ」（1例）、「雇（ヤト）フテ」（1例）も、促音便形が「思（オモ）ツテ」（9例）、「買（カ）ツタ」（3例）、「買（カ）ツテ」（9例）、「雇（ヤト）ツテ」（2例）と多い中で1例のみ現れたものである。「乞（コ）フテ」（1例）については、現在の共通語でも促音便形にはならない例である。

同じく西の出身である呉泰寿により明治38年に訳された『官話指南総訳』とは傾向が異なっている。このことは、『東語士商叢談便覧』がより当時の東京語の実態を反映している可能性が考えられる。

5. まとめと今後の課題

以上、『東語士商叢談便覧』（明治38年刊）を資料として、明治期から現代にかけて揺れのある表現について分析した。『東語士商叢談便覧』は、金国璞が明治34年から35年にかけて著した中国語教本『北京官話士商叢談便覧』の日本語訳であった。訳者は、文求堂書店の田中慶太郎である。田中は、書肆として『北京官話士商叢談便覧』をはじめ数々の書籍の出版を行うとともに、みずからも多数の書物を著した。『東語士商叢談便覧』はそのひとつである。

具体的に取り上げた項目は、人称代名詞、当為表現、ワア行五段動詞連用形の音便についてである。特に明治30年代における近代日本語の一端を同時期の他の

資料との比較を通して明らかにすることを本稿の目的とした。その結果、人称代名詞については、総ルビであることから、「私」「汝」「貴下」の読みが確定できることがわかった。これは、バラルビである『官話指南総訳』などでは確証を得ることができなかったものである。当為表現については「ナイ系」「ズ系」とも同程度現れていた。当為表現の周辺の表現として、現代語に通じる「ナケレバ駄目（ダメ）デス」、「ナケレバ駄目（ダメ）ダ」、「ナクツテハ駄目（ダメ）デス」という例が現れていた。これは、現れた6例すべてが原文の中国語「非～不行」「不～不行」等と対応しており、中国語を日本語に翻訳する際の問題との関連がある。同時期の小説や雑誌と比べても早い方の例となるので今後の研究の手がかりになる。ワア行五段動詞連用形の音便に関しては、『官話指南総訳』とは傾向が異なり、促音便形の多用が認められた。

【注】

(1)「貴」の誤字かと思われるが、そのままとした。

【参考文献】

- 伊藤虎丸（1992）「増井経夫氏蔵郭沫若致文求堂田中慶太郎書簡刊印縁起 付田中慶太郎関係資料目録初稿」『東京女子大学比較文化研究所紀要』53
- 国立国語研究所（2005）『太陽コーパス 雑誌『太陽』日本語データベース』博文館新社
- 園田博文（2016a）「『官話指南総訳』（明治三八年刊）の日本語—当為表現・ワア行五段動詞連用形の音便・人称代名詞を手がかりに—」『近代語研究 19』武蔵野書院
- 園田博文（2016b）「日中交流の先哲、宮島大八」『山形新聞（NIE欄・地域と学ぶ⑮）』11月28日号
- 園田博文（2017a）「『官話急就篇』『急就篇』訳述書4種の日本語—近代日本語資料としての性質と活用法について—」『山形大学紀要（教育科学）』16-4（印刷中）
- 園田博文（2017b）「杉本訳『官話急就篇総訳』（大正5年刊）における質問表現—大橋訳・打田訳・宮島訳との比較を通して—」『山形大学紀要（人文科学）』18-4（印刷中）
- 田中章夫（2001）『近代日本語の文法と表現』明治書院
- 常盤智子（2015）『英学会話書の研究』武蔵野書院
- 成家徹郎（2009a）「日中友好の断層—郭沫若と文求堂

- 田中慶太郎（上）一」『東方』344
- 成家徹郎（2009b）「日中友好の断層—郭沫若と文求堂
田中慶太郎（下）一」『東方』345
- 成家徹郎（2010）「郭沫若と文求堂田中慶太郎—交流の
軌跡—」『人文科学』15（大東文化大学人文科学
学研究所）
- 飛田良文（1992）『東京語成立史の研究』東京堂出版
- 諸星美智直（2009）「John MacGowan “A manual of the
Amoy colloquial” と三矢重松・辻清蔵訳述『台
湾会話篇』」『国語研究』72
- 八木正自（2011a）「文求堂田中慶太郎，唐本商の泰斗」
『日本古書通信』980号
- 八木正自（2011b）「文求堂田中慶太郎，唐本商の泰斗
②」『日本古書通信』981号
- 李慶国（2005）「郭沫若と文求堂主人田中慶太郎—重
ねて『郭沫若到文求堂書簡』の誤りを訂正す
る—」『アジア文化学科年報』8
- 六角恒廣（1994）『中国語書誌』不二出版